乳児の気質，母子相互作用と愛着形成

三宅　和夫（北海道大学教育学部）

目　的

新生児・乳児の気質的傾向はこれまで質問紙法によってとらえられることが多かったが，われわれはより直接的な行動観察によってすくなくとも気質的傾向のある側面を取り上げ，これが生後1～3年における児の母親に対する愛着形成にどのようにかかわっているか，また母子の相互作用のあり方が児の気質的傾向とどのように関連するのかを明らかにしようとした。

対　象

今回の報告では新生児期より満1年までの資料が収集された41例の札幌市に住むいわゆる中流家庭の児とその母親についての資料の一部が用いられた。このうちの19例の児は1980年生まれ，残り22例の児は1982年生まれであり，いずれも満期産で出産時に大きな問題のなかった児である。

方　法

ここで分析の対象となる資料は生後5日，4カ月，7.5カ月，12カ月に収集されたものである。

(1) 生後5日，北大病院新生児室で，生後2日と5日の朝，沐浴後児がコットの中で仰臥し，安静な覚醒状態のとき，つぎのテスト（Response to Interruption of Sucking，以下RISと呼ぶ）が施行された。ゴム製乳首を20秒間吸わせて静かに取り出し反応を40秒間観察しビデオどりした。それぞれ8試行がなされたが，以下分析においては出産のショックの影響が少なくて行動としてより安定性があり，脱落が少なかった生後5日の結果のみを用いる。泣きを＜Smooth / Organized＞と＜Effortful / Disorganized＞に大別した。Searching（頭を左右に動かしたり，唇を吸ったり，指を吸ったりする）→Grimace（情動反応としての表情の変化）→Negative Vocalization → Crying という順序で展開する，長いぐずり（10秒以上）や短いCrying のあとまたぐずるというようなことがない，リズミカルな Crying のあと自己鎮静が見られるなどを＜Smooth-Organized，以下SOと呼ぶ＞な泣きとした。SOは外部からのネガティブな刺激によるストレスの低減に対して効果的な泣きと考えられる。

(2) 生後4カ月（1982年出生の児のみ実施），2名の女性観察者が各家庭を午前，午後あわせて約3時間訪問。児が目ざめている時間における児の行動と母の対応をビデオどりした（最低90分）。ここでは特に泣きと，母の対応によりなだめられるかが中心に扱われる。

(3) 生後7.5カ月，実験室において見知らぬ男性の接近と母親との分離の状況が設定され，この状況における児の反応，特に恐れがビデオテープの分析により測定される。また別室にて遊具を介しての母子の10分間の自由遊び場面のビデオどりが行なわれ，母親の児への干渉的介入，母子の相互作用についての分析が行なわれる。

(4) 生後12カ月，Ainsworth Strange Situation における児の行動がビデオどりされる。これは次の8つの一連のエピソードから成る。1）（母，子，テスター（30秒），2）母，子（3分），3）知らない女性，母，子（3分），4）知らない女性，子（3分），5）母，子（3分），6）子（3分），7）知らない女性，子（3分），8）母，子（3分）。

結　果

まず，12カ月のStrange Situation での行動により41名の児はB型（安定愛着型）30名と，C型（アンビバレントな不安定愛着型）11名に分類された。なお，A型（回避的な不安定愛着型）はいなかった。

(1) 41名中32名についてRISと12カ月の愛着分類の結果が得られたが，SO型の泣きを新生児期（5日目）に示した15名の児のうち12名がB型，3名がC型であり，SO型の新生児が1年後に安定した愛着を形成す

る傾向が有意に高いといえる。これに対してED型ではB型10名，C型7名で，新生児の泣きと愛着の型には関係がみられなかった。

(2) 生後7.5カ月の実験室で恐れを示した児18名は9名がB型，9名がC型と半々になるが，恐れを示さなかった児16名中14名はB型，2名のみC型であった。このことから恐れを示すかどうかということと愛着の分類の間には有意な関係があるといえる（$\chi^2 = 3.86$, $p < 0.05$）。

(3) 生後7.5カ月の母子相互作用と児の示す恐れとがどのようにかかわりあって12カ月の愛着の型に影響するかを検討するために表1が作られた。この表から児が恐れを示さないタイプの場合は，母子相互作用の水準の高低にかかわらずB型となることが圧倒的に多いことがわかる。また恐れを示す児の場合は，母子相互作用の水準が高くてもB型，C型は半々，低くてもB型4，C型7で特に関係はみられない。このことから児の気質的傾向としての恐れと母子相互作用の水準との交絡をさらに検討する必要があるといえよう。なお相互作用の水準の高低は，母と子のやりとりが母→子→母→子……あるいは子→母→子→母と続く回数が10分間にいくつあるかを数えその中位数によって高低2群に分けた。

(4) 新生児期より1年までのすべてのデータが完全にそろっている12例について表2のようにまとめてみた。ここから新生児の泣きがSO型の場合は4カ月時の泣きが少なく，母によってなだめられやすく，7.5カ月時に恐れを示さないことが多く，12カ月の愛着も安定した型となること，さらに母子相互作用の水準・母の干渉度は関係がないことが推測される。つまり扱いやすい気質傾向を新生児に示す児の社会的・情緒的発達は母子相互作用のいかんに無関係に良好といえる。他方，ED型は大きく2つにわかれる。真中の4例では12カ月の愛着は安定した型になるが，これは母子相互作用の水準の高いこと，母の干渉度の低いことと関係がありそうである。下の4例では不安定な愛着の型（B_4，PCはCの亜型）を示すが，これに母子相互作用の水準の低いこと，母の干渉介入度の高いことが関係しているようである。このように新生児期に難しい気質を示す児が1年後に安定した愛着を示すかどうかに，その間における母子相互作用のあり方が関係しているということから，このような児をもつ母親への早期からの援助の必要性が示唆されよう。

表1 Level of Mother-Infant Interaction & Infant Fearfulness at 7.5 Months as indicated by Attachment Classification

Future Classiffcation in Strange Situation	High Level of Interaction		Low Level of Interaction	
	Fearful	Not-fearful	Fearful	Not-fearful
B(N=20)	2	10	4	4
C-type(N=10)	2	0	7	1

chi square=10.47, $p < 0.02$

表2 Infant Temperament, Maternal Interactional Style & Attachment Classification

Subject Number	Neonatal Cry Type	Frequency of Cry (4 months)	Soothability (4 months)	Fearfulness (7.5 months)	Attachment Classification (12 months)	Level of Mother-Infant Interaction (7.5 months)	Maternal Intrusiveness (7.5 months)
2107	SO	L	H	L	B2	H	L
2109	SO	L	H	L	B2	L	H
2111	SO	L	L	L	B2	H	L
2205	SO	L	H	H	B2	L	H
2105	ED	H	L	L	B3	H	L
2108	ED	H	H	H	B2	L	L
2113	ED	H	H	H	B3	H	L
2202	ED	H	L	H	B1	H	L
2103	ED	H	H	L	B4	L	H
2114	ED	H	L	H	PC	L	H
2115	ED	H	L	H	B4	L	H
2211	ED	H	L	H	C1	L	H

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

目的

新生児・乳児の気質的傾向はこれまで質問紙法によってとらえられることが多かったが，われわれはより直接的な行動観察によってすくなくとも気質的傾向のある側面を取り上げ，これが生後1〜3年における児の母親に対する愛着形成にどのようにかかわっているか，また母子の相互作用のあり方が児の気質的傾向とどのように関連するのかを明らかにしようとした。